

たぐみ

Craftsmanship

特集1 第11回島岡達三師弟展
 特集2 嶋田悦子と弓浜絋展

第6号

地震と松本民芸家具

たぐみの店舗が、まだビルにする前の、昭和四十五年頃の話である。たぐみの建物は木造三階建てで大谷石貼り、土蔵風の造りであったから、昭和八年十二月の開店以来の月日は、建物のあちこちに軋みを生じて、階段の登り降りにもそれを感じることがあった。

その年のある日のこと、結構大きな地震があつて棚の飾り物が落ちたりして、来客の方や社員が一斉に外にとび出したのであった。すると一人が「三階の家具売場にまだ女の方がおられるはずよ!」と叫び、私ともう一人がすぐかけあがつたのである。

そのご婦人は泰然として松本民芸家具の筆筒に手をおいて、「たぐみさんの家具につぶされて死ねたら、私は本望よ」といわれ、そのあと三十分ほども陳列家具を楽しんで帰られた。

私は今なおその折りのことを忘れる

ことは出来ない。その方は松本の家具のほか陶磁器、とりわけ沖繩のやきものが好きであった。いつもたぐみに来られると一時間以上も売場で過ごされて、そして品物を楽しんでいかれた。

今とちがつてその頃はまだ、モノが貴重で大切にされていた。それだけでなく物を求め使うことが単なる消費ではなく、自らの精神と生活文化の充足感に欠くことの出来ないものであったのだと思う。

作り手も同じであった。松本民芸家具の主宰者池田三四郎の、現代の日常生活の中に生きる本格家具造りへ寄せた熱情は、作る家具や、彼の言葉や文章をとおして使い手に伝わり、松本民芸家具を一つでも使つてみたいという人たちをふやしていった。

松本民芸家具の原点は日本や海外の伝統家具にあるが、柳宗悦、浜田庄司、バーナード・リーチたちの指導も得て、今日では日本を代表する家具に育つたといつてよいと思う。(志賀直邦)



土屋典康 二彩モーニングカップ



松崎 健 織部扇面皿



五十嵐俊樹 塩釉くし目皿



島岡龍太 象嵌花瓶

たくみ企画展
第十一回島岡達三師弟展

会期 九月二十六日（金）～十月一日（水）
会場 たくみ二階ギャラリー
出品者 島岡達三 土屋典康 松崎 健 島岡龍太
宮嶋正行 明賀孝和 浜田英峰 五十嵐俊樹
川上真悟 前山幸弘 岡田崇人 福田るい
筆谷 桂

師弟展の息の長さ

昭和五十六年に島岡先生の師弟展がスタートしてから、今年は二十三年目になる。第一回は当時三十代、気鋭の弟子土屋典康、松崎健両氏と先生との



左
上
から
明
賀
孝
和
岡
田
崇
人
宮
嶋
正
行
前
山
幸
弘
福
田
る
い
筆
谷
桂
浜
田
英
峰
川
上
真
悟

三人展であった。五十九年の第二回展には、これにご子息の龍太さんと黒田泰藏さんが加わって賑やかな会となった。六十一年の第三回展は五十嵐俊樹、それにドイツから来たセバスチャン・シャイトが入って国際色を添えた。

第四回展（六十三年）にはさらに新しいメンバーが加った。宮嶋正行、リチャード・バリンジャーの二人の弟子に、陶工ではないが島岡先生を師と仰ぐ木漆工芸の松崎融である。先生は案内状にこう書かれた。「今年は、また新しいメンバーが加った。宮嶋も融も、それぞれ茂木に住まいと工房を建てて我々の仲間となった。志を同じくする者がふえるのはうれしい」。

師弟展も回を重ねると、先生も来客も出品者のバラエティを楽しまれるようになっていった。平成五年の第五回展は、新卒の弟子明賀孝和のほか、賛助出品として一門の筆谷等（版画）、筆谷淑子（ガラス）や松崎融（木漆工）も参加、さらに島岡窯の職方や内弟子の大塚光

昭、神谷正一、神谷福二、羽石三郎、浜田英峰らが顔をそろえ、名実ともに島岡一門師弟展となった。案内状に先生は、十七人の会、と記された。

その後の第六回、第七回、第八回、第九回、第十回と隔年の会は、毎回十二人前後のメンバーで、この間の新人としては福田るい、川上真悟、前山幸弘、岡田崇人の皆さんであった。

そして今回の第十一回展には、今春卒業展をたくみで催した筆谷桂が晴れて参加することになる。

こうしてみると島岡窯での五年から六年にかけての修業が、若者たちにとつての良き学校であり、師弟展が新しい門出としての登龍門であることがわかる。

島岡先生にとつても二年に一度の師弟展は、各地で制作に励む弟子たちのその後の研鑽と生長の姿を見届ける、またとなない場であり楽しみな一時なのだと思う。私たちもまた、共に師弟展を楽しみたい。（志賀直邦）

弓浜緋と共に歩んで

嶋田悦子

漠然と、自分の手で布が織れたらいいなあ、との思いにはじまった仕事だが、今日の様に大きな広がりになるうとは夢々思っても見ないことでした。夫、^{たかひ}太平の、浜緋に寄せる思いに魅かれながら、共感の中で自分なりの愛着も生れて参りました。

昭和三十一年、柳悦博先生のもとで

教えを受けることにはじまり、柳悦孝先生の御指導も加って、白洲正子さんのお店「銀座こうげい」でも取あげて頂くことになり、地元では母稲岡文字が古老を尋ねて復興に奔走致しました。弓ヶ浜では農家の主婦達が棉を栽培しながら自家用に織り上げて来た緋の中に見応えのある多くの布が遺されて



鶴亀寿文着尺

居ります。民藝館の展覧会で村穂久美雄さんの集められた幾何紋の緋には、心ゆさぶられました。

四十年代に入って母の仕事も軌道に乗り販路も広がって参りますと、原料の確保や、生産量の限界にぶつかり、勢い輸入綿での機械仕事の道を辿りはじめました。

嶋田はこのままでは原点を失い兼ねないとの危惧から、十六年間お世話になった「たくみ」をはなれる決意をし、帰郷して工房を開き、柳両先生にも直々の御指導を頂いて、年輩の経験者に頼つての外注の仕事をつづける中で次世代の養成も心がけて参りました。

五十年代には組合を設立し伝統的工芸品（通産省指定）の指定も受けるまでになったのですが、幼児期からの喘息と闘いながらの生涯は厳しく、五十四年九月、仕事のレールを敷いて帰らぬ人となってしまいました。

「頑張^{がまば}らいや、旦那さんのために」と工房の仲間^{がまば}に力づけられて以来の二



棉の花実

十余年はまたたく間に流れ、着物離れ、バブル崩壊、鳥取県西部地震の被害等幾つもの山も谷もございましたが、細々とした仕事をずいぶん多くの人々に支えて頂いて、今日まで続いて参りました。

長い歴史に洗われた美しい布は、多くの教訓を与えてくれます。良質の綿、丹念な括り、織り、天然の美しい藍の色に恵まれた健康な布を求めて、及ば

ずといえども奥深い修業が続きます。すつかり世代交代をした仕事場も人数ながら一人一人の思いやりと優しさに支えられて明日への希望をつなげて参ります。

近頃では棉を育ててみたい、もめんの絵紺に、藍の色に惹かれてと、研修を希望して訪れる若い人達が、この仕事をとても新鮮と感じてくれる声を素直によるこんで居ります。



紺の種糸（上）とその型紙

特別展示会

第23回伝統文化ポラ賞
地域賞受賞を記念して

嶋田悦子と弓浜絣展

会期 十月十三日(月)～十八日(土)
会場 たくみ二階サロン

伝統芸能と工藝の振興と記録保存のために、永年にわたって活動されてきたポラ伝統文化振興財団の今年度の地域賞を、弓浜絣の嶋田悦子さんが受賞されました。

たくみでは嶋田さんの仕事を少しでも皆様に見ていただきたく、着物、着尺、のれん、卓布、袋小物、小裂などを取り揃え展示いたします。家内労働による少量生産で、お見せできる数は多くはありませんが、本統の手仕事の素晴らしさを御覧下さい。会期中ビデオの放映も予定しております。

弓浜緋のこと

鳥取県の西部、美保湾と中海をへだてた半島の、美保湾沿いに境港まで広がる海岸を弓ヶ浜と呼びます。その幅四キロ、長さ二十キロばかりの弓形の半島の村々で、江戸時代のいつ頃からか木綿の織物が作られ、独特な緋の模様も生まれて、それは浜緋という名で知られるようになりました。

織物研究家の村穂久美雄氏は、弓ヶ浜の緋について次のように書いておられます。「緋の仕事の始まりは何といつても綿づくりから始まります。砂地の畑に綿を栽培することの苦しさは、それをした人でなくてはわからない苦しさで、その重労働の果てに収穫した綿を手紡ぎの糸にして染め、高機で織り上げて生まれたものが弓浜緋です。」

「沖積地の弓ヶ浜一帯では、綿と共に藍も栽培され始めましたが、藍草の

質はあまりよくな、阿波藍一駄とくらべ地藍六駄くらいと昔はいわれていました。

村々の紺屋では藍がめを建て並べ、織り手に頼まれて緋糸や地糸の本染めに一生懸命の毎日でした。」(山陰の緋―季刊染織と生活―第20号より)

そして同じ山陰の倉吉緋や広瀬緋は全国に販路をもったが、どちらかという大量生産の波にのって、決して親切な仕事のみではなかった、と村穂氏はいいます。そして弓浜緋について、さらにこうのべています。

「弓ヶ浜の地で栽培した綿を手紡ぎにし、粗苧あらせで括り、むろん文様は美しさを温故知新したもので、本藍草を灰汁建てして染め、手織りで織り上げたものが、弓ヶ浜緋としてその名を呼ばれるべきものなのです。

そんな真面目な緋が、たとえ細々とも続いている以上、必ず何とか昔のように緋の花が咲くと信ずるのは間違

いでしょいか。」

村穂さんがこう書かれたのは昭和五十二年のことでした。その頃弓ヶ浜では、嶋田悦子さんの別文にもあるようにご一家を中心に、心ある人たちが弓浜緋の復興のために懸命の努力をしていたのでした。

組合長だった嶋田太平氏が亡くなられたあとも、その志は受けつがれ、糸に、染めに、織りに正直な仕事をつづけて今日にいたっております。

そしてこのたび伝統文化の振興に力を注いでいるポラ財団より、第23回伝統文化ポラ地域賞が嶋田悦子さんに贈られることになりました。授賞式は十月十六日ですが、たくみでは嶋田悦子さんの受賞を記念し、その仕事の一端を皆様に見ていただくために、十月十三日より「嶋田悦子と弓浜緋展」を開催いたします。私たちの祖先が生み出したすぐれた伝統の積み重ねとその美しさを、どうぞご覧下さい。(S)

昭和三十年頃の

外国人客

古川正夫

二十年代から三十年代、毎年十月頃からクリスマスセールが開始され、たくみの二階から吊された武者絵の大風が通りを往く人をびっくりさせ話題となりました。「月刊たくみ」十一号には、

大風の写真とともに解説記事が出ている。「今年クリスマス開始前から外国人客が多く相当な賑いが予想されたが、果たして大変な人気であった。新潟三条の大風はニッポンタイムズに写真掲載され、自分で写真を写してゆく外国人が多く大いに珍しがられた」また、それより以前の八号には、外国人客の動向が次のように報じられている。

「佐藤美子さん（著名な声楽家）の

ご案内でダミア夫人が見えいろいろの買物をされた。コルビュジエのお弟子で、戦前商工省に招聘されて輸出工芸品の指導をされたベリアン夫人の来店云々。また、大山郁夫氏（平和運動家）が、ピカソへのお土産として芹沢先生のものれんを買われた、等々」

ことほど左様に、まだ日本が占領下にあった時代、たくみには外人客、それも相当なインテリ・文化人が多かったのです。

この外人客に人気があったのは、船木道忠氏でした。氏は、島根県松江宍道湖にのぞんだ風景明媚な布志名窯で、息子さんの研児さん（私と同年配）と陶業を営んでいました。布志名と地続きの湯町窯は、ガレナ（鉛）釉という黄色に焼き上がる釉薬とスリッパ模様が特徴で、イギリスのスリッパ・ウエアに似ていることから、バーナード・リーチは来日すると船木窯に好んで逗留し、数々の傑作をものにしました。

そんなことで、船木父子の作品は、外国人に人気がありました。私が入社した昭和二十七年十二月に、船木父子展が三階ギャラリーで開催され、大卒の私は英会話ができるだろうと（買いかぶられ）その展覧会の担当となりました。その日、まだ開会早々でお客も少なかつたところ、一人の上品な初老外人紳士が会場を歩きつ戻りつ時間をかけて熱心に作品鑑賞していました。その外人は、とくに小物を楽しそうに顔を近づけ鑑賞していました。その姿に船木さんは、大変感激され、「私は小さな作品といえども魂こめて作ります。それをこんなにも熱心に見てくれ、心から感激している」と伝えてくれと仰るのです。私は冷汗かきながら「心から」を「バイハート」なんてプロークンイングリッシュを行使してなんとか意を通じさせることができました。

（山種美術館嘱託）

棟方志功とたくみ

今年には棟方志功のちようど生誕百年目にあたる。地元の青森県はもちろん日本各地で盛大に記念の展覧会や、講演会が行われた。新聞報道によればアメリカのフライデルフィア美術館でも回顧展が催されたという。

棟方さんは明治三十六年九月五日、青森市に九人兄弟の三男として生まれた。家業は鍛冶屋だが、少年時青森市の大火に逢う不運もあって貧しさの中で育った。

それでも天性絵を描くことが好きだった彼は、独学で自らの造形表現の道を切り拓いていく。雑誌白樺の挿絵で見たゴッホの「ひまわり」に感激し、「ワダバ、ゴッホになる！」といった話も広く知られている。

ゴッホに憧れた棟方さんだったが、

しかし根底にはねぶた祭りや勇壮な武者絵風にも「みちのく」縄文人の、本源的な魂に満ちみちていた。

棟方さんは昭和十一年春、国画会展に出品した「大和し美し」を柳宗悦たち民藝同人に見出され、知己を得て急速にその才能を開花させた。たくみともその頃からの付き合いである。

「浅沼氏（昭和十年から十九年までのたくみ店長）が、暗い奥の部屋から『今日わ！』と、わたくしが、あのギイギイの格子目のガラス戸を開けると、よく分つてくれて声をかけてくれた。『よくわかりますね』と言うと『棟方さんは開け方が格別だからね。芹沢さんでも、柳悦孝さんでも、それぞれですね。岡村（吉右衛門）、鈴木（繁男）、棟方つて、元気どころからは屏賃を払って頂くんですな』」

上野訓治氏（浜田庄司先生の口利きで鳩居堂から来られた、当時の仕入責任者）を、わたくしは、たくみの頼り

にして、民藝の作と土地、その作り手のことを教わった。金の事、展覧会の事、何の相談にも乗ってくれた。たくみからの前借の事も願った。たくみにはそんな情が憑いていたのだ。

畳の部屋は暗かったが、上り込んで夜おそくまで話した。たくみという空気の中には、民藝館とは、また別な育てがあったのだ。この文は、「月刊たくみ」の開店二十周年記念号（昭和二十八年十二月号）に寄せられた、棟方先生の一文である。

「前々の事で、たくみで株を売るといので、十株をチャの名前で買った。（昭和十六年の増資の時）その金を払う期限まで来ても金が無かった。浅沼氏は、いつもとは違って『株式というものには……お酒からのタンカを真に受けて、わたくしは、その日の内に壁にかけてあった、水谷良一先生から頂戴した梅原龍三郎の五号の『裸女群浴図』を即座に、十二段家さんに電報で売り

をたのんで、売金、全部で払った。

その後の増資の時には（昭和二十八年）、こつちから願って百四十株をいただいたが、それは即座に払った。金もこころも、また、たくみの状さまも、その頃とそのようなちがいがあつた。」

いかに棟方さんらしい言い回しの中に、戦前から戦後の復興期にかけて、作り手もたくみも貧しく、しかしまだ同志みんなのものであつた頃の店の姿が浮びあがつてくるのである。

民藝品がその言葉通りに、また民衆



棟方志功「木板画磯鷲」

的工藝品としての性質を少なからず持ち、知られず、安く、そして工藝作家の作品もまた身近かな時代であつた。

棟方さんは、このあと昭和三十年にブラジルのサンパウロ・ビエンナーレ国際美術展に「釈迦十大弟子」などを出品し版画部門最高賞を受賞された。

翌三十一年には、イタリアの第二十八回ベニス・ビエンナーレ展で国際版画大賞を受けられるなど、その知名度は国際的なものとなつていった。因みにベニス・ビエンナーレ展での前回の版

画大賞受賞者は、ホアン・ミロであつた。

その頃たくみでは、民藝協会同人作家の身近かな小品を欲しいという多くの愛好家の要望に応じて、作品販

布会を企画した。その会は諸先生方の協力を得て三十二年春にスタートしたのであつた。

それは河井寛次郎「ぐい呑」、浜田庄司「湯呑」、芹沢銈介「型染カレンダー」、棟方志功「木板画磯鷲」、柳悦孝「手織卓布」、船木研児「灰おとし」、河井武一「扁壺」であつた。

いずれも今日では高い市価であろうが、当時は学生でも買える安い価格で販売させていただいた。そしてその業務を二十代半ばの私が担当し、荻窪の棟方さんのお宅へも二度ばかり伺つたこともなつかしい思い出である。

いま棟方志功生誕百年に際し、その藝業と人柄の偉大さを考えると、私の筆の及ぶところでないことを強く思うのである。それとともに棟方さんほど人間的で、多くの人たちに親しまれ愛された人もいなかつたと思う。まことに棟方藝業の魅力は尽きることがない。

（志賀直邦）

相馬貞三『美の法門研鑽』を読む

藤田邦彦

相馬貞三氏が亡くなってから、十五年になる。氏は、民藝の世界にあつて、岩木山すなわち津軽富士のような存在であつた。津軽平野に屹立するその美しく尊いまでの姿を、ひとびとは敬愛の眼差しをもつて仰ぎ見るのだ。

柳宗悦の最も早くからの弟子のひとりであり、全国に先駆けて民藝協会の地方支部、青森支部(のちの青森県民藝協会)をつくり、「つがる工藝店」に拠つて民藝の普及と啓蒙活動に邁進した。若いころから東洋思想と仏教を学び、柳の民藝美論、なかんずく難解とされる『美の法門』に肉薄した。

相馬は、明治四一年、青森県竹館村に生まれた。名望家にして大地主の三男で、その恵まれた境遇に悩む青年であつた。幼いときから片方の視力がなかつた。難しい漢語や仏教用語をちりばめた詩を作る詩人であつた。その詩

集『朝雲』は百六十頁で、なんと六十頁の別冊『註』が付いている。骨太の立派な書を書いた。棟方志功の生涯の友であつた。そしてもちろん津軽弁であつた。

生前の氏の講話を聞いた人は、相馬先生のはなしはさっぱり分からなかつた、と懐かしそうに語る。津軽弁で話される『美の法門』は、二重に難解であつたらしい。その難解なはなしを纏めた本『美の法門研鑽』が、氏を敬愛する人々の手によつて、この夏、地元青森で出版された。

とにかく難かしい、わたしの能力ではお手上げである。しかし、美の真実を自己の全存在をもつて探究しようという気迫と、その真理を千万言費やしても後から来るものに伝えようとする熱意、一途な思いは、人の心を強く打つのである。しかも相馬は、分るとか

分つたとは言わず、こう言う。

美というものは口で言おうとしても本当はいえないわけであります。「不知に聞せず」。ただし、知、不知に聞かないのだから考えたつてむだじゃないかと。考えなくたって美はそこにあるのだから、などといつてみると、決して自分のものにならない。つまりふだんの暮らしの中に美としてあらわれているんじゃないかと、美になり得る何かがあるんであります。(35ページ)

津軽山唄では、「十五になつたら山参り」とうたわれる。一度も相馬の譬咳に接することができなかつたわたしは、成人式を済ませていないことになつてもいい。そう思えるほど、この本から立ち現れてくる相馬の姿は、切実で誠実である。民藝と民藝運動が、こういう地の塩のようなひとに支えられたものだということに、襟を正す思いであつた。(東京民藝協会会員)

『美の法門研鑽』頒価三、五〇〇円
たくみで取り扱っております。

映画「わらびのこう」を観て

— 恩地日出夫監督作品 —

村田喜代子（芥川賞など受賞）の小説「蕨野行」の映画化で、恩地監督による映画化の企画がスタートしてから足かけ八年目の完成という。

恩地さんは私の大学時代の親しい友達で、この作品の映画化への熱い想いも二、三年前からうかがっていた。

山形の最上地方、日本でも指折りの豪雪地帯を舞台に、何年か一度はよく凶作を村ぐるみ生き残るために、村

の六十の齢を越えた年寄りたちが人里離れた蕨野に移り住み、里の仕事の手伝い働きで日々の糧を得ながら死を迎えていくという話である。

他の村にも秘した内々の約定で、庄屋の姑といえども免れることはなかった。そこに描かれる人間模様は、定めとはいえ悲喜交ごもだが、この映画の導入部の、あのなんとも美しい山河の自然の美しさは、悲劇の中にも温かい心があり、新しい生命の宿りがあることを暗示しているかのようだ。

それにしても雪国の、とりわけ東北地方を中心とする豪雪、冷害地帯の凶作は江戸時代から痛ましいものであった。昭和初年の頃からの東北地方の大冷害は、陸軍若手将校による二・二六事件の遠因ともなったが、娘たちの身売りや国策としての満蒙

開拓団への青少年の大量参加などの悲劇も生んだ。

だいぶ以前に柳悦孝先生（染織家、元女子美術大学学長、先日九十二歳の方だが、戦後間もない頃、民藝協会の用事で山形のある村を訪ね、農家に泊めてもらった時のこと。どうみても居間のほかに家族の部屋はなく、不思議に思つて夜半に隣接する納屋をのぞいたところ、家族皆が高く積んだ藁山の中にもぐつて寝ていたという。

もつとも藁山や藁の布団は暖かく肌にも良い。映画の中でも八人の老人たちが筵と藁をかぶつて寝床としていた。昔から災害や凶事は天災ばかりではない。人為的な要因も多いことも重ね合せ、今日的課題として「わらびのこう」を見終つたのであった。

（志賀直邦）

一般公開は新宿東映パラスタ2にて十月初旬より。特別割引鑑賞券一枚千円をたくみで預っております。店頭でお頒けいたします。



たぐみ歳時記

槌起銅器の鍋

秋風が吹くようになると、もう鍋の季節です。鍋も土鍋、鉄鍋、石鍋とありますが、今回は槌起の銅鍋を紹介しましょう。この銅器は銅板を何回も焼きなましをし、金槌で叩き締めていねいに形を整えた品です。熱伝導が良く、素材の持ち味を損わずに調理できますので専門家に喜ばれます。

作る人は京都の北村一男さん。有次



行平鍋

で修業して独立、どこよりも丈夫で使いやすい易く、形も美しいものをと心掛けておられます。

製品の種類も多く、やかん、ミルクパン、行平鍋、シチュー鍋、玉子焼、フライパン、天ぷら鍋のほかたいいていの鍋を作ります。

銅鍋の手入の仕方は、使用后、外側はクレンザー等で磨くこと、内側は錫引きがはげないよう、スポンジに洗剤をつけて、軽く磨い下さい。なお残った料理は別の器に移し替えて下さい。



蓋付シチュー鍋

あとがき

司馬遼太郎に私淑し、島岡達三、須田剋太の作品を愛蔵した異色の蒐集家大島嵬よちの美術館「新星館」が、北海道美瑛町新星の丘に誕生した。

大島氏は早大を卒業後機械工具の自営を経て、東大阪でお好み焼店伊古奈を経営するが、間もなく島岡先生の繩文象嵌作品に触れ、こよなく愛好するようになる。以来の蒐集の足どりは全国に及び、先生の話によれば、質、量ともに一、二を争うという。

「新星館」の場所は旭川から富良野線で九つ目、美馬牛駅下車三キロ、美しい景観の美瑛の丘にある。来年のいつの頃か皆で訪れたい。(S)

発行 株式会社たぐみ

東京都中央区銀座八丁目二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)